

ファーミングスクール・ルポ

業が、ファーミングスクールを開催する意味



7月29日～31日、齊藤牧場には多くの参加者が集まった

去る、7月29日から31日に北海道・旭川で開催された「創地農業21」主催「第6回グラスファーミングスクール」に参加しました。私自身、過去に数多くのセミナーに参加してきましたが、今回のセミナーは様々な面で大変勉強になりました。

その理由として日本のフードサービスの分野において「顧客第一主義」の精神で、ファミリーレストラン「びっくりドンキー」はじめ個性的なレストランを全国的に展開している株アレフ社・代表取締役の庄司昭夫氏の環境や土のレベルから「食」を追及する視点によるセミナーであるからです。

このスクール自体は酪農家向けではありませんが、酪農家だけでなく、試験研究機関に関する人から、農業資材の製造や販売に関する人、そして農産物の流通販売に関する全ての方々が、参加する意義を感じ、ここに紹介させていただきます。

(編集部・後藤芳博)

農業技術指導のビックバン！

この「グラスファーミングスクール」は回を重ね、既に今回で第6回目を迎えます。このスクールは、世界一生産コストが安いといわれるニュージーランド（以下NZ）型集約放牧の技術の取得を主眼を置いています。

指導に当たるのは、東京農工大学にて農学士を取得した後、日本を離れてNZマッセイ（Massey）大学大学院農学課程を経て、現在は農業コンサルタントとして、NZ初め各国で活躍している「エリック川辺博士」他、NZで活躍する優秀なコンサルタント達であります。

因みに、日本には馴染の低い「農業コンサルト」という職業ですが、元々は日本と同じく公的な農業試験場の研究員として仕

事をしていた人が多いようです。なぜなら、行政改革によって、農業への補助金カット・特別優遇税制なしと同時に、試験場が民営化された結果、研究員の多くが民間のコンサルタントへと移行したのです。NZ農業は、この他にも生産や流通の構造改革の結果、国際競争力を付けて見事に生まれ変わり、同時に、元研究員のコンサルタント達も、よりシビアな技術指導に応えながら、積極的に各国へとクライアントを拡大しているのです。

農業技術指導の世界も、ついに国際競争に突入した事を実感しました。

ニュージーランド式・草地農業

さて、このスクールは、エリック川辺博士が1992年より北海道で取組んできた

●グラフ 外食



川辺博士（右）とアレフの庄司社長



4月にはフランスからチーズ・コンサルタントを招いてチーズ講習会を行った

SRU（土研究ユニオン）が前身になつて
います。

アレフ社の庄司社長と、NZ放牧システムと野生動物管理システムを販売するガラガラエイジ(株)・小谷社長に出会い、発展的にスクールがスタートしました。

スクールは、講師との交流を重視し、人數を毎回30人に限定し、期間の3日間中、

牧草を育てる土についての講義がスケジュー
ルに組まれている。

また、「夜なべ談義」や食事には、食堂業ならではの、演出されたケイタリングにより、豪華な食事を満喫出来る事もこのスクールならではの事でしょう。

因みに、今回のスクール開催地は、「蹄耕法」で有名な、かの斎藤牧場でした。この「蹄耕法」については、簡単に説明する事は難しく、そして誤った事を伝えては申し訳ないので、別な機会に譲るとしますが、自然と人が共生共栄する世界は、斯くも素晴らしい世界なのだと、唯感激するばかり

また、「夜なべ談義」や食事には、食堂業ならではの、演出されたケイタリングにより、豪華な食事を満喫出来る事もこのスクールならではの事でしょう。

因みに、今回のスクール開催地は、「蹄耕法」で有名な、かの斎藤牧場でした。この「蹄耕法」については、簡単に説明する事は難しく、そして誤った事を伝えては申し訳ないので、別な機会に譲るとしますが、自然と人が共生共栄する世界は、斯くも素晴らしい世界なのだと、唯感激するばかり

更に、毎夜夕食後に「夜なべ談義」と命名された、交流の時間と空間が用意されています。

④ 牧草と牛の栄養分析との関係
⑤ 生態系維持としての放牧管理のあり方

集中講義と、実際の牧場の土や草や牛を観察し指導、アドバイスを受けるフィールド学習が、朝から夜中まで隙間無くスケジュールに組み込まれています。

この「グラスファーミングスクール」の延長線上に、フランスからチーズ・コンサルタントを招き、本場フランスのチーズ製造手法を学ぶチーズ講習会が開催されています。

いう字は”良い人“をつくると書きます。ですから”食産業“とは”良い人を産み出す業(なりわい)“なのだと考えています。

農業は農業者のため
あるのではない

さて、今回は参加出来ませんでしたが

するのもお客様でなければならぬとも教わりました。私は農業においても全く同じ事がいえるのではないかと思っています。人の生命を育む”食“の、この”食“という字は”良い人“をつくると書きます。ですから”食産業“とは”良い人を産み出す業（なりわい）”なのだと考えていくま

とにかく、農家は採る量の事ばかりでなく、最終商品である「牛乳」や「乳製品」の品質や販売、そして消費者の事への意識を蔑ろにしている場面が多いのではないか？

とにかく、醣農家は搾る分量の事ばかりはかりに、没頭し、最終商品である「牛乳」や「乳製品」の品質や販売、そして消費者の事への意識を蔑ろにしている場面が多いのではない

一見 大した事でないようには思われるが、
かもしれません、乳製品後進国の日本に
とって、また、生産者にとって、この取組
みは大変画期的のではないかと思つてい
ます。

ます。

私は、酪農家に限らず、全ての農業経営者の人達に、より消費者の立場に立つた生産をしていただこうと願っています。

健康な牛乳を消費者にお届けする所から生えて来た健康な草を牛に食べさせなければならぬはずです。ですから、このスクールも単に栽培技術を学ぶ事だけではなく、消費やお客様の事を学ぶ場にしたいと思っています。」と…。

また、日本の場合、欧米と比較すると「チーズ」などの乳製品文化が大変貧しいわけですが、その理由の一つとして二元管理された日本の牛乳生産と流通の構造的問題があり、生産販売する自由を学ぶ場もありませんでした。

そして、グローバル化する日本人の味覚や嗜好性に対応する意味でも、昨今のワインブームの余波として予感させる「チーズ」ブームに対応する意味でも、「チーズ」生産について生産者が学ぶ事は大変意義深い事であると思っています。

そういう意味でも、このスクールのコンセプトは大変素晴らしいと思っています。

「創地農業21」発足の原点

の農業者を担うリーダーを育成する目的で「創地農業21」は、新しい北海道

発足した民間のプライベートな組織です。

誕生のキッカケは、庄司社長と小谷社長

と、NZ国籍を持つエリック川辺博士との

出会いがあつた事は先程述べましたが、確かに出会いが無ければ、発足のキッカケも何も無かつたのでしょうか、果たしてその事だけが発足の原動力だったのでしょうか?

人との出会いは「一期一会」ですが、出会いによって新しい何かを産み出される事は、そう頻繁にあるわけではありません。

また、エリック川辺博士が30余年日本を離れていたものの、混迷・低迷する日本の酪農に対し、プロのコンサルとしての、まつた、日本人としての使命感の様な想いがあったのではないかと拝するところであります。

また、エリック川辺博士が30余年日本を離れていたものの、混迷・低迷する日本の酪農に対し、プロのコンサルとしての、まつた、日本人としての使命感の様な想いがあつたのではないかと拝するところであります。

この2つの熱情と霸氣があればこそでは

ありますが、私はその2つのエネルギーが十字に結ぶに及ぶ接点に、基本的に農業とは直接的に関りのない食堂業の庄司社長の計り知れない想いを感じるのであります。

それは、「利益の出ない仕事は社会貢献

の他社の人間や、農業界の人間の中には「どうせ社長の道楽でしょ!」と吐き捨てる輩もいます。

しかし私は、「創地農業21」を発足し

た庄司社長の本当の意図するところは、底

冷えする北海道の酪農業界だけではなく、日本の農業に対しての深い愛情のように受

け取れます。

庄司社長は、「今の農業を見ていると、

食堂業の創業期の29年前に似ているように思えます。当時は食堂業もどこも小さな、

いわゆるパパママストアばかりでした。

実家の旅館を手伝うようになつたが、一体

何をやつたらよいのか分からなく悩んでい

る時に、ある勉強会に参加し、多くの先輩

方が親身にアドバイスしてくれたお陰で今

日の自分がいるんです。」そしてその時

のアドバイスとして

「社会に還元されない仕事は繁栄しない」と言われ、「どうやって恩返しをしたらよいか」と尋ねれば、「同じような人がいたら同じようにしてあげなさい」と述懐されていました。

これらの経験と、その理念を実践する信

念があればこそ、この「創地農業21」が誕生したのではないかと拝するのであります。

それは、「利益の出ない仕事は社会貢献

地農業21」は、よくありがちな、ある特定の農法を研究し、普及するというような組織ではありません。

特筆すべきは、未来の農業を担うリーダーを育成する事を本義としている点であります。これはまるで、黒船の到来により、江戸末期の国難に、吉田松陰が「松下村塾」を、緒方洪庵が「適塾」などを起したように、他にも多くの國士が起した私塾から、倒幕と後の新政権を担うリーダーが輩出されました事を彷彿させます。

21世紀まであと僅かですが、農業界だけにかかるわらざ混沌としており、そんな時だからこそ、「創地農業21」の存在の価値があるのだと思います。

セミナー参加者のある人が「夜明け前が一番暗い…」という事を言つていました。

それは明るい未来を待ち焦がれる人が言う言葉です。

そう言える人こそが、この「創地農業21」に共に参加し、共に汗をかき、共に学び、共に日本の農業の未来について語り、そして、共に行動を起そうではありませんか!。

▼ 「創地農業21」事務局〒003-8515北海道札幌市白石区菊水6条3丁目1-26 (株)アレフ内 TEL011-823-8301 Fax011-824-9289 担当・久保博子

■ 「グラスファーミングスクール」
問合わせ先

「創地農業21」事務局〒003-8515北海道札幌市白石区菊水6条3丁目1-26 (株)アレフ内 TEL011-823-8301 Fax011-824-9289 担当・久保博子

誤解の無い様に申し上げれば、この「創